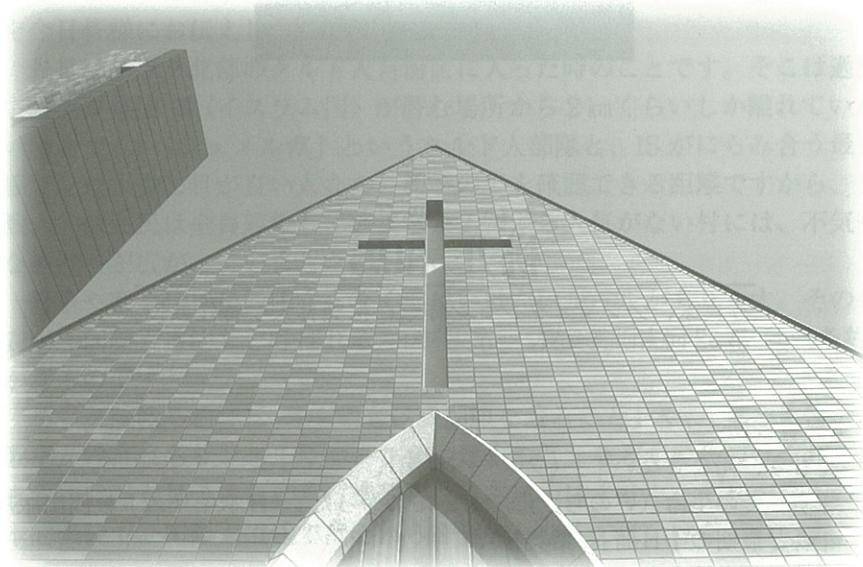


宗教が戦争の原因? 一神教がアブナイ?

桃井和馬



名古屋学院大学 宗教部

「宗教が戦争の原因？ 一神教がアブナイ？」

桃井 和馬



ももい かずま
桃井 和馬

写真家、ノンフィクション作家、桜美林大学特任教授。
第32回太陽賞受賞。

主要著書に

「もう、死なせない！」（フレーベル館）、
「すべての生命（いのち）にであえてよかったです」（日本キリスト教団出版局）、
「妻と最期の十日間」（集英社）、
「希望の大地」（岩波書店）、他多数。

共著は

「3・11 メルトダウン」（凱風社）、
「東日本大震災 - 写真家17人の視点」（朝日新聞出版）、
「生きる」（日本写真家協会編 新潮社）など多数。

【はじめに】

現在の日本では、ユダヤ教、キリスト教、イスラム教などの一神教が危ないといわれがちです。

本当に一神教は危ないのでしょうか？ また本当に「宗教戦争」は頻発しているのでしょうか？

これまで私は紛争、戦争なども取材してきました。その中で感じたことを今日皆様にお伝えしたいと思います。

先日、イラク北部のクルド人自治区に入った時のことです。そこは過激宗教テロ集団IS（イスラム国）が潜む場所から2kmくらいしか離れていない場所で。「ペシュメルガ」というクルド人部隊と、ISがにらみ合う最前線でした。少し目が良い人なら、相手の姿を確認できる距離ですから、当然、一般住民は全員避難していました。だから人気がない村には、不気味な静けさが広がっていました。

紛争や戦争には最低限守らなくてはいけないルールがあります。その代表が「国際人道法」と呼ばれる、「ジュネーブ条約」や「ハーグ陸戦条約」があるのです。

ハーグ陸戦条約には、「交戦者は戦闘服を着ること」や、「見える位置に徽章と呼ばれるシンボルやマークをつけること」などが義務づけられています。武器も見えるところに携帯しなくてはいけません。それが兵士の基本的服装で、国際人道法ではそれらを遵守しなくてはいけないのです。

ベトナム戦争の頃まで、戦争には前線があり、ハーグ陸戦条約を遵守した兵士たちが、その場所で戦うというのが「国際標準」でした。敵味方が双方に霸権を争い、相対する「対称」の存在として認め合っていたのです。

これが変わり始めたのは、イラク戦争の頃から。一般市民の恰好をしたイラクの武装兵が、アメリカ兵を狙うようになった。イラク戦争を経験したアメリカ兵に、ものすごい数でPTSDになる者たちが現れていますが、大きな原因が、どこから誰が襲ってくるかが分からない戦争だったから。

人混みの中で立って警備している場合、近寄ってくる老人や子どもが武装していることがあまりにも一般化したからです。「非対称の戦い」と言われるゲリラ戦が先鋭化したのです。このような状況の中では、立てるだけでも過多な緊張を強いられるわけで、兵士たちの精神は、蝕まれていきます。

今回フランスのパリで発生した銃撃事件（2015年11月13日に起きた「無差別同時多発テロ事件」。死者130名、負傷者300名以上）の場合、テロを起こす側は、兵士を狙うことさえしなかった。一般の人たちがターゲットになったのです。

非対称の戦いの場合、「ゲリラ」とか「反政府組織」という時には、それをしかける側にも一定の道理があります。歴史をふり返ってみれば、権力が暴走して、全体主義体制を敷いたり、暴力的な独裁権力になることが少なからずあったからです。

けれども国際人道法にあるように、一般市民を巻きこまないことが前提です。

それを外れ、一般市民をターゲットにするとなると、それはただの犯罪でしかない。そうしたものを「テロ」と呼ぶのです。

今回の場合は、2～3人の狂信的で、独善的なテロリストが事件を起こしたものでした。

インターネットやSNSの時代です。たったそれだけの人員でも、事件は一気に世界を駆け巡るのです。世界を震撼させる事件を2～3人のテロリストが簡単に起こせる時代になったのです。

世界人口73億人の内、23%がイスラム教徒です。つまり17億人のイスラム教徒がいて、その中の2人とか3人です。

犯罪者は、それくらいです。逆に17億人の大多数は、市民を明確なターゲットにした今回の事件に強い懸念を示したのです。

日本人はすぐに、イスラム教と今回の事件を関連づけようとします。しかし、多くのイスラム教徒が哀しみ、懸念を示したように、イスラム教に原因を探しても、絶対にこの事件の背景を理解することはできないでしょう。

オウム真理教は仏教を名乗りました。しかし、多くの仏教徒の人々がオウム真理教のテロ行為に非を見つけました。到底、仏教とは異なっていたからです。

これと同じ原理がISなどのテロ組織にはあります。社会の格差であったり、マグマのように溜まった解消しきれない不満がある。

宗教が原因にあるのではありません。また一神教が原因なのでもないのです。

【戦争はなぜ起きるか】

戦争はなぜ起きるのか、これを考える上で恰好の譬えが、日本のことわざのひとつ「火に油をそそぐ」です。

火の要素とは、だいたい「土地（領土）」「食料」「水」「資源」です。実はそれらすべては地球にある限られたものなのです。

第一次世界大戦、第二次世界大戦は、領土、つまり土地を巡る争いでした。土地を持っていると、食料や資源を確保することができます。結果的にお金を生むのです。

これまでの世界では、多くの場合、この火の要素が「本当の原因」となり戦争が起きたのです。

皆さん間違えないでください。多くの学生さんは、「宗教はいつも戦争をしている」と信じています。しかしこれは完全な間違い。戦争を起こしたい側に洗脳されているといつても過言ではありません。

資源や土地が欲しい場合、私が「これくれ！」と唐突に言い出して奪つたなら、当然、言われた相手は怒ります。「ふざけるな！ これ、私のだから」って。

そればかりか、どう考えてもまっとうな理由がない私の言い分に、誰もついては来ないでしょう。だから道理がない私は力で奪い取ることなどできないのです。

そんな時に、私はどうするのか？

油を注ぐのです。

油の要素が、「民族」であり「宗教」です。これは地球に存在しないもの。概念であったり、心の有り様です。

皆さんの家の台所には「油」が置いてありますよね。私の家にもサラダ油やごま油やオリーブオイルなどが台所には置かれています。しかし、そうした油を火の横には持っていないか。これは常識です。火が直接当たる場所に置けば、当然、油に火がついてしまうからです。

これはあまりも当然過ぎることでしょう。皆さんは油の取り扱いを知っているのです。次に、3大栄養素のひとつが脂質というように、皆さんの身体の一部は脂質、つまり油で出来ているのです。特に脳の6割は脂質。つまり油がないと生きていけないわけです。

コモンセンス（常識）でしょう。人には油が必要なのです。

運動会などでよく使われてきた曲に「軍艦マーチ」があります。軍艦マーチは昔、パチンコ屋さんの入り口でもいつも流れっていました。聴くだけ

で興奮してきます。だから私が幼い頃は、どこの運動会でも使われていました。

しかし軍艦マーチとは、第二次世界大戦の時、日本軍が、兵士の士気を上げる時に流していた曲なのです。人々の気持ちを盛り立てていく。人々を興奮させるのです。

そしてこれらの音楽が、火に油を注ぐ時に、効率的に火を大きくする時に用いられてきたのです。

そして使われたのは音楽だけではありません。多くの場合、人々の帰属意識を高めるスポーツなども為政者によって利用されてきたのです。

「火」の要素は地球にあるものです。一方、「油」の要素というのは地球に存在しないものです。目に見えないもの、「概念」と言い換えることができるかもしれません。

人類史を振り返ってみれば、ごく数度の例外以外、すべての戦争は地球にあるものを巡る争いでした。戦争では普通の人が銃器を取ります。銃を手にした瞬間にその当人も死ぬ可能性があります。生物学的に自分たちの状況がよほど追い込まれていないと、そうした状況に立ち向かうことはできません。逆にいうと追い込まれると皆さんもそういうふうになってしまふ可能性があるということなのです。

例えば、今ここにいる多くの人は「なぜ人は、死ぬ危険を冒して戦争をするの？」と考えているでしょう。まさにその通りです。けれどもそれは、皆さんが「火」の4要素において満ち足りているからです。

食事が十分に取れ、水も飲め、寝る所もある。だからそう考えるのです。そんな時は絶対に戦いは生まれないので。

しかし、色々な原因で食料がなくなってしまう、色々な原因で住むところから追われてしまうという状況になった時に、人々は銃器を手にする。

今、この場所（チャペル）だけでも、仏教の人、神道の人、無神教の人、キリスト教の人がいるのでしょう。また、日本人だけではなく、韓国籍の人も、中国国籍の人もいるでしょう。皆がきちんと食べられ、人間らしい生活が出来ている今は、宗教や民族の違いが問題の元にはなりません。誰も、隣の人を殴ろうとは思いませんよね！

しかし関東大震災の時には、流言飛語が元で、日本人は韓国人や朝鮮人の人を殺害しました。パニックに陥った時、人々は簡単に、「究極の解決法」としての暴力に走るのです。

つまり、戦争を防ぐためには、その事実を認識し、そのような原因を作らないことこそが大切なのです。

【疑似戦争】

私はサッカーが大好きです。スペインのプロリーグの常勝チームに「レアル・マドリッド」があります。このチームのファンは、「レアルはスペイン一強いチームだ。だから世界一強いチームで、世界一強いということは銀河一強いわけだ」と冗談を言うくらいです。彼らのホームスタジアムは、マドリッドにある『エスタディオ・サンティアゴ・ベルナベウ』です。8万人観客が入るサッカー専用のスタジアムです。

普通スタジアムといえば、サッカーのピッチ（グランド）もあるけど、その周りには陸上のトラックもあり、そのため、観客席からピッチはかなり離れているんです。ですがここはサッカー専門のスタジアムですから、観客席が長方形のピッチのすぐ横からすり鉢状にそそり立ち、そこに8万人の人が入るわけです。

今のスタジアムが造られたのは1947年のこと。1936年に始まったスペイン内戦でその前にあったスタジアムが破壊されていたからです。

1947年とは、スペインにとってどのような時代だったでしょうか。

1936年に始まったスペイン内戦。その後は、フランコ将軍の独裁政権下にあったのです。フランコは、ナチスのヒトラーとは違っていました。

スペイン人がフランコ将軍へ抱く思いは複雑で、今も彼のお墓には墓参の人が途切れません。ヒトラーの誘いにのらず、第二次世界大戦にスペインが参戦しない決断は、フランコによって下されました。今に続く君主に権力を譲渡したこと、歴史の中ではひとつ的事実で、それが今に続く立憲君主制に繋がったのです。

しかし、独裁政権であったこともまた間違いない事実なのです。

スタジアムが作られた時、スペインは、フランコによる独裁政権時代下にありました。

独裁政治から人々の目をそらす。同時に真っ二つに分かれていたスペイン国民をひとつにまとめる。そのために、最も人気が高いスポーツが利用されたのです。

私はサッカーが大好きですが、スポーツがいかに為政者に使われているのか。皆さんも、2020年の東京オリンピックまで、それをきちんと監視し続けて下さい。

オリンピックで盛り上がった時には色々なことが行われる可能性があるんです。

1936年にベルリンで開催されたオリンピックが、ナチスに利用され、ナチスのオリンピックと称されたことは有名です。

独裁から目をそらした人々はスポーツに熱狂したのです。

しかし、それにより、600万人のユダヤ人が犠牲になったわけです。スポーツは戦争に利用されます。そして宗教や民族と同様に「帰属意識」を高める働きがあるためです。

ロシアのプロ・サッカーチームが作られたのは1935年。これは、独裁者スターリンが敵対する者たちを粛清はじめた時期です。最終的には2000万人にも達したと言われるほどの殺害が背後で行われていたのです。

ロシアのサッカーチームは職業別に作られています。鉄道のチーム、自動車のチーム、KGBのチーム。すごいですね、諜報組織であるKGBもチームを持っていたんです！ それと陸軍のチームなどです。

陸軍（チェスカ）は常勝のチームでした。

なぜいつも勝つかというと、陸軍のチームであるチェスカは、毎夜、他のチームの強い選手を武力で脅し、チェスカに入れていたから。

でも、脅して、強い選手を集めたチームの試合など面白いわけがありません。

そんなことさえ、スターリン政権下の人々は理解できないほど、頭が硬直していたのです。

ちなみに、チェスカのモスクワ支部が「チェスカ・モスクワ」といい、以前、本田圭佑選手が所属していたチームなのです。

本田選手はすごい選手です。ですがそういう歴史があったとわかったうえで私たちは楽しいサッカーを見ていく必要があると思います。

サッカーは疑似戦争だから人々は熱狂します。私は疑似戦争があつていと思っています。

サッカーで日本の最大ライバルといえば、韓国でしょう。

日韓の試合では、「あそこだけには負けたくない」という強いライバル意識がむき出しになります。でもサッカーの場合、あくまでも疑似戦争であり、本当に人を殺すことはありません。

それだけではありません。たとえ韓国に負けても、韓国チームがある方が嬉しいのです。理由は、またいつかドキドキする日韓戦が見たいからです。

ライバルがいるから味わえるあの興奮。そのためには韓国チームが必要なんです。

スポーツは疑似戦争ですが、相手を殲滅しません。相手が必要なのです。それがスポーツの良さでしょう。

【オセロゲームの理論】

戦争の時にどういうことが必要になるか、一番大切なのはオセロゲームの理論です。オセロゲームで、一番強いコマの置き場所はどこでしょう。誰もが知っています。角が一番強い場所です。

角に自分のコマを一つ置くだけで、相手のコマが全部がひっくり返る可能性があります。つまり角こそが重要で、これを「要衝」というのです。

要衝は、いつも戦争に巻きこまれ続けました。逆に言うと、重要でない場所では、なかなか対外勢力との間で、戦争を経験することができませんでした。

これこそが戦争の大きな原因のひとつで、領土がある場所によって、戦争が頻発したのです。

【新しい神】

私たち人間は簡単に慎みを忘れてします。だから人間を超えた存在が必要なのです。

いえ、私たち人間は、人間を超えた存在がないことに耐えられないのです。

この中には、無宗教だという人もいるでしょう。

でも本当に無宗教でいるためには、無宗教である意味を徹底的に考え方抜き、理論武装しておく必要があります。

無防備な無宗教の場合、簡単に新しい神様に乗っ取られてしまいます。

事実、宗教を否定してきた戦後日本の社会には、新しい神様が入ってきました。

その神様の正体とは「お金」「数字」「順位」などです。

人間は人間を超えた存在がないことに耐えられません。だから人間が人間を超えた存在がない時には、新しい宗教にすがろうとするのです。

お金、これは宗教として機能するのでしょうか。「お金を儲けるためだったら死んでもいい！」という人もいるでしょう。でも冷静に考えて下さい。死んでしまったなら、誰が手元のお金を使うのでしょうか。

私はお金が人間を超えた存在でないことを試すために、飼い猫に自分のお金をあげてみたことがあります。1000円札をあげました。でも我家の猫（モモ）は、まったく私のいうことを聞いてくれませんでした。

お金は人間の世界でしか通用しない存在に過ぎません。つまり、まったく人間を超えてはいないのです。

しかし今、私たちの世界は、このお金によって振り回されています。

現在一日で1兆ドルのマネーが世界中を徘徊しています。皆さんが必要になって得られるお金は実はこの10分の1ぐらいです。その10倍のマネーがクリックひとつで、世界中を駆け巡り、時には自然を破壊し、時には戦争の原因を生み出しています。

これが危ないお金です。これによって人々が生死を分けるような状況が現れてしましました。まさしく無防備なままで「お金」という神様に、人生ごと振り回されているのが、私たちではないでしょうか？

ここでひとつの問題を提示します。

日本が世界の収穫される食料の50%を買い付けていると仮定します。日本経済が強くなり残りの50%も買い付けることに成功したとすると、日本は世界の食料をどれだけ輸入できるようになったでしょうか？

なんのひねりもありません。答えは100%です。 $50+50=100$ 。数学でもなく、算数の世界ですね。この式は合っています。正しいのです。でもこれをやると確実に戦争が起きます。

知識としては正しいのですが、これを本当にやった時に戦争が起きるという「知恵」こそが、今、本当に求められているのです。人間の欲望をきちんと制御するという知恵がないと、この数式だけを見ると正しいから、皆率先してこれを実践しようとします。法律的には何も間違ってはいないのです。

これは食糧だけでなく、地球にある資源ならなんでもOKです。水、鉄、レアメタルなど、何でもです。

世界で一番大きなある食料品メーカーは、世界で一番水を買い占めようとしている会社でもあります。川や泉を柵で囲った時点で、水は、販売用の商品になります。だから、それまで無料で飲んでいた人もお金を出して買わなくてはいけなくなるのです。

川や泉がある土地を買ったのなら、そこで汲み上げた水の販売も、法律上は正しいのです。でも本当にそれがいたるところで進んでいったら、たぶん多くの人が水にアクセスできなくなります。人間の身体の7割は水分だといわれています。水が取れなくなつた瞬間、人間は生きられなくなる。それを防ぐために、水にアクセスできなくなった人々は、武器を持って立ち上がります。それによって戦争が起きます。それが一番怖いのです。

問題は数字に善悪がないこと。数字は数字でしかなく、善でも悪でもありません。

しかし、数字に人々の心が操られると、数字が人を撃ち始めるのです。

私たちは類人猿から人間になっていました。

類人猿と人間が最も違っているのは、前頭葉の大きさだそうです。

類人猿では考えられないぐらい肥大化した前頭葉には、A10神経というものが張り巡らされているのです。A10神経は「一所懸命頑張ろう。もうちょっと頑張ろう」という神経です。頑張った時に、A10神経は報酬としてドーパミンという神経伝達物質をもらえます。

ドーパミンは強烈な麻薬です。だから快感を得た脳は、またもう少し頑張ろうと努力します。

実はこれが、類人猿が人間に進化したきっかけになりました。だからこそ人間は高度な文明を築くことができたのです。

しかしA10神経には、「十分」な時に止めるスイッチはないのです。だからひたすら「もっと、もっと」とドーパミンを出す方向に突き進んでしまうのです。依存症の原因もこのドーパミンといわれるくらいで、自分の力ではなかなかドーパミンの爆発的な噴出を止めることはできません。

もっと欲しい、もっと欲しい、もっと欲しいと、なっていきます。

そして気が付いてみれば、人類の足元の環境さえ破壊しているというのが、昨今地球規模で起きていることです。

どうでしょうか。これまで経験したことのない環境異変が地球を襲い始めています。50年に一度の災害といわれるようなものが多発しています。たとえばメキシコでは1000年に一度ぐらいしか訪れないサイクロンがやってきました。1000年に一度ですよ。目に見える形で環境異変がきています。その時に多くの人が食べられない状況が生まれています。貧富の差が広がって、それが様々なところで、様々な紛争の戦争の原因になっていきます。いかに私たちがA10神経の暴走を止めていくかが、今本当に望まれている知恵ではないでしょうか。

さて2014年に青色発光ダイオードでノーベル賞を受賞した日本人は何人いるでしょうか。3人という答えが多いと思います。産経新聞にはこのように書かれています。「日本人3氏に栄誉」3人ですね。

別の資料には「日本の3氏に」というように表現が変わっています。よく見ると「中村修二先生=米国籍」となっています。米国籍とは、つまりアメリカ人ということです。

私はある新聞社に電話して、それを尋ねました。

答えは次のようなものです。「ご指摘の通り、確かに今は米国籍ですが、研究した時は日本人でしたね。だから今も私たちは表記の中で『日本人』を

使用するのです」

結局の所、中村先生がアメリカ人だと大声で言うと日本人がシラけてしまうので、ずっと大手のマスコミは書かなかったとわかりました。その事実を書くと雰囲気が悪くなってしまうから書けないとというのです。でも、中村先生はなぜ、アメリカ国籍を取ったのでしょうか。

その理由が2014年10月8日の日本経済新聞に一度だけ載りました。「先生、アメリカ国籍にした理由はなんですか？」と記者が質問すると、中村先生は「こちらでの研究ではアメリカ国籍がないと軍の研究費がもらえないからです」と。

つまりアメリカ軍から予算をつけてもらうために、彼は国籍を変えたのです。軍の予算は無尽蔵です。青色発光ダイオードは、軍が喉から手が出るほど欲しい技術です。それを応用したらぶん色々なことができるでしょう。

だから軍はいくらでもお金を出す。そして先生はいくらでも研究できる。こんな楽しい「Win Win」の関係はありません。しかしこれこそA10神経の暴走ではないでしょうか。研究知識に善悪はありません。研究者は面白いから、時には悪魔にも魂を売るのです。しかし、本物の研究者とは、際限無き己の欲望を止める歯止めを用意してある人だと思います。それこそが今必要な時期にきてていると思います。

皆さんは、ランチを食べたばかりでしょう。今日のランチはいかがでしたか。

十分にご飯が食べられたなら、何も問題はありません。

しかし例え、私が独裁者で、今日、みなさんが食べたランチの量を4分の1にする。それも1日1回だけすると宣言し、武力で脅かしたらどうなるでしょう。

本当にそんなことがあれば、身体の弱い人からどんどんと倒れて死んでいきます。

実はそれに近いことが起きているのが、アフリカであり、アジアで貧しい生活を強いられている階層なのです。

ご飯が食べられない時、食糧が無くなった時、社会の中で最初に影響を受けるのが抵抗力の無い子どもたちです。すぐにバタバタと死んでいきます。次にお年寄りが死んでいくのでしょう。強靭な肉体を持つ10代から20代の皆さんが最後まで生き残るのでしょう。食糧不足の時、自分たちの子どもや親が目の前で死んでいくとすると、どうなるでしょう。自分も遅かれ早かれ食料不足で死んでしまう可能性もある。そんな時に、みんな

武器を取り、熱狂的な戦闘状態が生まれるので。

1994年4月から7月の3か月間で100万人を殺害するという大虐殺がルワンダという国で起きました。これは人類史に記録されている大量殺戮です。ルワンダの人口は800万人ほど、その中の約10分の1か、それ以上の人人が3か月間で殺害されたのです。ルワンダは淡路島くらいしか面積のない国です。そこで毎日毎日、3か月間一日1万人ほどの人が殺害されていったのですから、あらゆる所に死体が溢れたと言います。

最終的には山積みになった死体をブルドーザーで掬い、穴に投げ入れました。

その時の殺害は、「民族」が理由で起きたと考えられています。

ルワンダには主にツチ族、フツ族、トゥワ族の3民族がいます。フツ族がツチ族を主に狙って殺害を続けたのです。

殺害時に使用された武器は、伝統的なもので、鉄を木の棒に埋め込んだもの。それで次々に頭を殴っていました。ですからほとんどの頭蓋骨は割れています。それほど憎悪が膨れあがっていたのです。

ルワンダの戦いは、一般的に「民族紛争」で説明されます。

しかし現地に行くと、それが違うということも分かるのです。

ルワンダの山の斜面のほとんどは畑です。かつてルワンダの国土70%は森でした。しかし今ルワンダの大地に残る森は1%から2%ほど。それ以外は全部畑です。それも斜面に沿って畑がつくられているのです。

丁寧に見ると、段々畑はわずかで、ほとんどが斜面の勾配にそって畑が作られていることがわかるのです。するとどうなってしまうでしょう。雨が降ると、当然表土が流れていきます。

1980年代まで、ルワンダの川は透明でした。しかし、1990年代初頭になると、その色は真っ黄色に変わっていました。流れ出たのは土で、川の色が変わってしまったのです。ここで注意しなくてはいけないのは、表面の土が最も栄養豊かなこと。

そして栄養豊かな表土が流れ出てしまった後は、いくら耕しても満足な作物を作ることができない土しか残らないのです。

1980年代、ルワンダの人たちはおよそ2500キロカロリーの食料を、自分たちの畑から作ることができました。しかし1990年代初頭になった時には、およそ1000キロカロリーしか作ることができなくなっていました。いくら働いても作物ができない、そして作物ができないことによって食料が極端になくなってしまいました。飢餓が始まっていたのです。

そして飢餓などで社会状況が悪くなると、決まってささやく者たちが現

れます。

「あいつらが悪い」「あの民族さえいなければ君たちは幸せになれるんだ」という具合にです。それが熱病のように広まっていき一気に社会の表面へと出てしまう。その結果、3か月で100万人を殺害するという事件に発展していったのです。

今、ヨーロッパに多くの難民が流入しています。多くの人はシリアから来た人たちです。シリアではイスラム国というテロリストが暴れています。

なぜシリアはこんなことになってしまったのでしょうか。東北大学の明日香寿川先生が書かれた記事がとても興味深いです。“シリア難民問題の多くの要素の一つとして地球温暖化がある。同国では2006年から10年にかけて史上最悪といわれる干ばつが発生した。最新の研究によると温暖化が風の流れを変えて降雨量を減少させ土壌から水分を奪った。アサド政権が水を大量に必要とする綿花栽培を奨励したことでも重なり農業生産量が激減、穀物価格が高騰し、栄養不足で子どもの病気が広がっていた”（朝日新聞 2015年10月17日）というのです。

大方の人の理解は、ISがテロを続けているため、100万人近いシリア難民がヨーロッパに渡ったというもの。しかしその問題の底には、食糧問題があったのです。2006年から2010年まで、すでにシリアの環境は徹底的に破壊され、食料不足が深刻なレベルに達していました。全員が食べられていたなら、絶対にあの規模の難民は発生しません。私たちはその事実にこそ目を向ける必要があります。

平和はどうやって築くのか。

平和という漢字を理解するとその意味が端的に理解できます。

まず和という字ですが、解体すると「禾」と「口」になります。「禾」は穀物、垂れ下がる稲穂です。そして「口」は、その穀物を食べる口です。これが和やかで穏やかな状態だということです。

次に平の字の語源をさかのぼると、浮草という意味だと知ります。

水の上に草が浮いている状態は上にも下にもならず平らということです。そこから平等という概念が生まれたのです。そこから派生した言葉が、穀物を平等に分けるという意味の「秤」です。平和とは食べ物を分け合うこと、そしてそこから平和が始まるということがわかったわけです。

【一神教だから戦争をするのか】

多くの日本人が「一神教だから戦争をする」と考えています。けれども、よく考えてみましょう。明治の時に廃仏毀釈ということで仏教が神道に弾圧されたこともあります。四国の4つの県の全てに行くと興味深いことに気づきます。愛媛、香川、徳島にはお寺が多いです。けれど高知に行くと途端にお寺さんが少なくなります。理由は、廃仏毀釈の運動の結果、お寺が焼かれ、破壊されたからです。

また第二次世界大戦は「国家神道」が精神的支柱になりました。結果的にそれがアジア侵略に繋がっていったのです。

日本人の中には、「一神教より、仏教の方が絶対的に平和です」と考えている方もおられます。これはある面では正しく、ある面では間違っています。

ミャンマーでは、現在でも仏教がイスラム教徒を弾圧しています。またオウム真理教も仏教を名乗る者たちの集まりでした。

つまりどの宗教にも悪い奴がいて、どの宗教にも素晴らしい人がいるのです。

同じことはイスラム教にもいえます。イスラム国が出てきた時に私たちはなんだかイスラム教は怖いというイメージができてしまいました。イスラム教人口はだいたい17億人です。イスラム国の戦闘員はだいたい2万人ぐらいだといわれていますから、イスラム国のテロリストはイスラム教徒の中にどれぐらいいるのかというと0.0012%でしかありません。本当に小さい割合でしかありません。しかし彼らがやっていることがあまりにも目立つので、また彼らがインターネットなどの使い方に熟知しているため、多くの人々は、「イスラム教の人は怖い」と短絡的に考えてしまいます。イスラム国という名前もよくありませんね。もしオウム真理教が「仏教国」を名乗って事件を起こしていたら仏教が怖いとなっていたと思います。

どの宗教も人間が関わることで数々の間違いを犯してきました。だからこそ、逆説的に人間を超えた存在が必要になるんだと私は思っています。世界の宗教の割合を見ると、キリスト教というのはいい悪いは別にして分母が大きいのです。仏教が5%で3~4億人ぐらい、キリスト教は31%で、22~23億人ほどの人口があります。分母が大きい分、影響力が強く、目立ってしまうのです。その結果、今「一神教が怖い」と平均的な日本人は感じるでしょう。

しかし考えてみると地球上に住んでいる人の半分が一神教に属しているのです。そういうことなら一神教をきちんと理解することが平和構築の第一

歩であり、ビジネスをする時に相手を理解するための知識になるのです。一神教だけが戦争をするわけではなく、多神教も仏教も戦争をする可能性を秘めています。しかし同時に宗教は「戦争を止める力」も持っているのです。実際、信仰に基づき、命をかけて戦争に反対した人は沢山います。

宗教は、戦争の本当の「根本原因」とは関係ないのです。

一番怖いのは、「火に油が注がれた」時に、それに気が付かずに乗ってしまうことです。宗教が悪いと思っている人は、逆にいうとそれに乗りやすいのだと私は考えています。本当の原因を見据え、本気で消化しなくてはいけないのです。

戦争は止めるチャンスが2回しかありません。戦争が始まる前か、お互にが戦えないほど疲弊した後です。

それ以外のポイント、たとえば、お互いに激しく戦っている時に第三者が止めに入ると、戦争をやっている当事者たちは嫌がります。なぜかというと自分は今勝っている、自分は勝てると思っているからなのです。そのため介入する第三者に「なぜ、勝っている私たちの方を止めるのか」となるわけです。

完全に双方が疲弊した後で、戦争を止めても、被害は甚大で、金銭的にもお互いに深い傷を負うことになります。それがまた次の戦争の種火にもなるのです。

それであれば、戦争は、始まる前に止める。つまり起こさないことが大切なのです。人類に必要なのは、そのための知恵でしょう。

2015年10月31日、231名の乗ったロシア機がシナイ半島でISに撃墜されました。そこから北に50キロメートルほど行ったところに、モーゼが神から十戒を授かった山（シナイ山）があります。

そこにセント・カタリナ修道院というキリスト教の修道院があるのです。ここは現存する修道院の中で最も古い修道院です。6世紀に造られ、1500年間この場所でずっと修道生活が営まれているわけです。

現在、周辺に住むのは、ほとんどがイスラム教徒です。修道院の中にいるのはもちろんキリスト教徒です。

興味深いのは、修道院の中では多くのイスラム教徒の人々が働いていること。キリスト教徒とイスラム教徒が共に食事を作り、働いているのです。これこそが1500年間修道院がこの場所で営みを続けるための知恵でした。

戦争をむやみに煽るのではなく、考え方の違う人々を一方的に断罪するのでも、蔑むのでもない。その逆で、考え方の違った人と共に生きる方法を、

修道士たちは懸命に模索し続けてきたのです。

今、私たちに必要なのはこういう知恵です。

思想や宗教が違う人を、「違う」というだけで差別するのではなく、思想や宗教が違うことを理解したうえで、相手の宗教を理解し、互いにどうしたら平和を構築できるのかを考える姿勢です。

宗教というとカルト宗教が思い浮かんでくるのが、今の日本です。宗教と聞くだけで、皆さんの中にも怖いイメージを持たれている方もおられるでしょう。

まっとうな宗教と、カルト宗教の根源的な違いは何でしょうか。

カルト宗教は、それぞれの人が考えないように導き、盲目的に指導者に従うことを強制するのです。

この対極にあるまっとうな宗教は、人々が考えるための基準となる「ものさし」を提供するのです。たとえ社会が変わっても、自分だけは変わらないという価値判断に必要な「ものさし」です。ものさしがしっかりしていれば、たとえ、社会全体から嫌われようが、見棄てられようが怖くはありません。

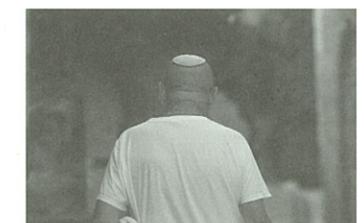
この大学にはかつて、内村鑑三という立派な先生がおられました。内村先生は、第二次世界大戦中、すべての人が天皇の写真を挙げる中、一人だけ、挙まず、日本中からバッシングの対象になった人です。内村先生は、非国民と言われ続けました。しかし自分の信じるもののために、バッシングされようが、バカにされようが、そして罵られても、自分の信念を貫き通した。内村先生は敬虔なキリスト者です。そしてこの態度が受けたのも信仰を持っていたからです。これこそ、宗教の本当の役割ではないでしょうか。

【何ができるのか】

欧米で歴史を持つ総合大学は、大概神学部から、その歴史を刻みました。その理由は、「神学」を通して、神という目に見えない存在を解明しようとしたことから、大学が始まったからです。神の存在を証明するために生物学、物理学などの学問が生まれたわけです。

無限に拡大する人間の欲望を制御する「本物の知恵」。搖るぎない神の存在。

その一端を、人々は神学から知ろうとしたのです。



キリスト教はユダヤ教から始まりました。キリスト教が「旧約聖書」と呼ぶ書物は、元々ユダヤ教の聖典でした。

ユダヤ教の男性は、キッパという小さな帽子を頭に乗せます。

この帽子を被っても日差しは防げないし、頭を寒さから守ってくれるわけでもありません。しかし、それでも彼らは、頭に置くかぶり物に強いこだわりを持っています。

そして「シナゴーグ」と呼ばれるユダヤ教の教会に入る時などには、必ずこの帽子を被るのです。なぜ帽子を被るのでしょうか。理由は、「人間を超えた存在が、人間の上にはある」「人間は神による被造物だ」ということを忘れないためです。

人間は弱く、すぐに自分が一番だとか、自分は偉いんだとうなづけます。慎みを失います。それを防ぐために、弱い存在だということを覚え続けるために、ユダヤ人は帽子をかぶり続けるのです。

人間には、人間を超えた存在が必要なのです。

「正義と信仰と愛と平和を追い求めなさい。」

(日本聖書協会 新共同訳聖書 テモテの手紙二 2章22節)。

それぞれができるなどを正義と信仰と愛に基づき、平和のために「行動する時代」です。

2015年11月24日（火）名古屋学院大学宗教講演会

「宗教が戦争の原因？ 一神教がアブナイ？」

桃井 和馬

チャペルブックレット No.20

2016年5月1日発行

編集・発行 名古屋学院大学 宗教部

〒 456-8612

名古屋市熱田区熱田西町1番25号

TEL 052-678-4096

印 刷 有限会社 五十嵐印刷